

宮内彩の New Zealand Style no.8 Karen Walker

カレン・ウォーカーと初めて出会ったのは、2000年のルイ・ヴィトンカップのパーティの時。当時、私はまだ日本に住んでいて、ニュージーランドファッションに関して何も知識がなかった。立ち話で、「ニュージーランドのファッションって、どうなの？」と聞いてみた。「私の以前には、この国にはファッションデザイナーと呼べる人はほとんど存在しなかったのよ」と話していたのが印象的だった。こちらで暮らし、NZのファッション業界とも関わるようになった今、確かにカレン・ウォーカーは早い段階から世界のマーケットに目を向けていたことについては、他のデザイナー達の何歩も先を進んでいる、先駆者的存在だ。また、カレンはライセンスビジネスに於いても、ニュージーランドの他のデザイナー達をリードしている。彼女の名前のペンキのブランド、そしてジュエリーラインが既にあり、今後カテゴリーが増え続けることは間違いない。

今回、彼女とのインタビューで受けた印象は、デザイナーであると共に、優れたマーケティング能力と、ビジネスセンスを持ち合わせているということ。常に彼女のビジネスにとって最も有利な道を選択することが基準となっている。「6〜7年前に北半球への輸出を始めました。それは、ニュージー

ランドとオーストラリアだけでは限界があるということを感じていたからです。自分らしさを損なわずに、ビジネスを拡大する為には、北半球に目を向けるしかありません。世界で20店舗しか、自分の服を売りたい店はありません。また、20媒体しか、自分の服を載せたい雑誌もありません。そこにターゲットをしぼり、そこに入る事ができれば、他は全てついてくるものです」と自信に満ちて語る。

ニュージーランド・ファッションウィークに2003年まで参加しなかったことでも、愛国心を問われた彼女だが、「ビジネス的にメリットがない」とクールに決断したのみ。2003年にはジュエリーの新しいラインの発表に最適の場だと判断し、始めて参加を果たしたのだ。

毎シーズン、25〜50%の著しい成長を遂げているカレン・ウォーカー帝国。「毎シーズン、ビジネスの成長を50%以内にとどめるよう、コントロールに努力しています」と嬉しい悲鳴の連続だ。「自分を『ニュージーランドデザイナー』だとは思いません。私はニュージーランド人で、デザイナーですが、この仕事に国境はないと思います。ただ、この国のカジュアルさが、私の服にも反映されていると思います」という彼女。そんなグローバルな考え方が、彼女が

TOWN

ストライプのTシャツはおそろいのベルトがポイント。膝丈に縫り上げたジーンズと。

WORK

デニムのドレスをタートルネックのセーターの上に重ねて。結びつけたベルトがアクセント。

WEEKEND

デニムのオーバーオールは低い位置にベルトを結んで。

PARTY

フィギュアスケートの衣装のような、フェミニンなドレス

CASUAL

スウェットシャツのプリントが可愛い。

PARTY

ビーチ色の肌見せロングドレスでしっとりフェミニンに。

DINNER

ホルターネックのドレスは、レトロなプリントが粋。

WORK

懐かしい雰囲気ベストをあしらって。



世界的な規模でビジネスを成功させている秘訣かもしれない。この国の他のデザイナーにありがちな、どこか土着的な愛国心は見られない。

今回の春夏コレクションはウッドイー・アレンの映画「アニー・ホール」のダイアン・キートンのキャラクターよりインスピレーションを受けています。彼女がイメージする女性は、常に「アイドル」的な女性ではなく、輪の外にいるアウトサイダー的な存在だという。北半球向けと、南半球向けに、同時に二つのコレクションを手がけるカレン。ロンドンコレクションで既に発表された秋冬物を、春夏に編集したのが現在店頭に並んでいる春夏ものだ。

「日本には1年半から2年に一回行き、ショップやプレスの方々と交流の機会を持つ事ができます。日本人の人は、私の感性を理解して下さるので、言葉が通じなくても問題ありません。

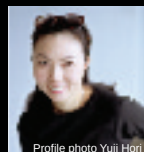
ロンドンには年に2回、コレクション発表の為にいきます。1年のうち、9ヶ月は必ずニュージーランドにいます」

ロンドンをコレクションの発表の場を選んでいるカレン。常に彼女の作品は、各国のファッション媒体から高い評価を受けている。「ロンドンには新しいアイデアの発信地です。新しいデザイナーたちは、ロンドンで発掘されます。ただ、我々も成長に伴い、今後

ニューヨークでコレクション発表をすることも考え始めています」

北半球でのビジネスに積極的なカレンだが、NZから離れることは今のところ考えていないと言う。「時差、距離などは常にマイナスですが、ビ

ハビーチに朝の散歩にでかけられる環境は、何ものにも代え難いことです」



Profile photo Yui Hori

宮内彩 東京生まれ。西町インターナショナルスクールを経て、スイス、ル・ロゼ高校、米タフツ大学卒業。帰国後、パリ・ミラノ等世界のコレクション取材。雑誌・新聞・テレビ・ラジオ等でファッション・コラムニストとして活動。オークランド在住の中村嗣氏と結婚のため、2000年より生活の拠点をNZに移動。01年、長男・章人君。02年、次男・天人君誕生。子育ての合間を見て、旅・食・住等ライフスタイル全般のコラムニストとして英語及び日本語で執筆活動を行っている。著書は近代文藝社「おしゃれのエッセンス / おしゃれのエッセンス 旅コレクション」(母・大内順子と共著)等。NZでの生活のエッセイが載っているホームページはwww.ouchi-junko.com